■自分が性病になった事（女・19）
■看護学校での友達の態度。女もかなりエッチだと思った（男・23）
■初めて好きな人に抱かれたとき。幸せだった。本当の私を受け入れてくれて、そして抱いてくれたから。私は自傷しています。彼はそれにとまどいはしながらも、受け入れてくれました（女・21）
■読んだ本、小説、マンガなどからの影響が大きいと思う。が、根底にあるのは、小学生の時に、ちょっとした拍子に父親の持っていたエロビデオを見てしまったことから、「おとなしかしちゃいけないもの」という考えになった気がします（女・21）
■始めて見たアダルトビデオが気持ち悪くて、あんなことはしたくないな～って中学生ながら思いました（女・21）

セックスによってうつる病気や避妊についての知識はどこから得ていますか

■ 学校の授業やレポート課題で調べた（女・20）
■ ともだち、雑誌（男・21）
■TV の情報番組、教科書、レポートを書くために読んだ本（女・21）
■ビデオと本をはじめてみたとき（男・19）
■女性誌、TV、友人（女・25）
■雑誌、教科書、友人（女・21）
■ともだち、本、教科書、テレビ（男・21）
■学校、家のたんす、ビデオ、友人（男・20）
■避妊→大学の講義で性についてやったとき、しっかり聞いた。でもカレはほとんどわかっていない（女・21）
■学校の性教育（女・18）
■初めは性教育関連図書から。今はインターネット（男・24）
■さまざまな避妊方法については学校の家庭科か保険の教科書で読んだりした記憶がある。マイルーラは雑誌の広告で。ピルについては最近の新聞での低用量ピルについての記事で少し。けっこうこういうことに好奇心を持っていれば、それなりの情報は入ってくると思う（女・20）
■雑誌、ラジオ（女・25）
■授業友達雑誌テレビ（女・21）
■テレビや雑誌などありきたりのメディア（女23）
■師匠・本能・女子高生（師匠の取り巻き）（男・26）
■雑誌や授業（女・19）
■自分の仕事（女・25）
■ 友達の話。本。インターネット（女・26）
■本、友人、親、ですかね。。。（女・23）
■友達と話してるうちに（情報が）入ることも有りますが。友達のうちのエロ本を読んでて得る情報も有ります。だから発育上中学生ぐらいの子供がエロ本を読むことがありますが、良い経験だと思うので、読ませても良いかと思います（男・21）
■看護大学生なので、学校で（女・21）
■漫画、テレビ番組、友達、風俗の女（男・23）
■主に学校（特に大学）で、学びました（女・21）
■ある程度は、高校の授業で。ほかは、友人からや、彼氏、マンガなどから（女・21）
■大学の講義、友達避妊・コンドーム、女性用コンドーム、ピル、ＳＴＤ，クラミジア、（女・21）

あなたが考える「こんな情報がほしい」というアイデアがあったらお書き下さい

■性に対して大人がかくそうとすることで「悪いこと」というイメージがある。違った角度からのビデオなど商品化された性により接しやすい社会状況がよくないと思うので、正しい性をちゃんと教える授業を中学校でやればいい（女・20）
■小中学生への性教育の段階では、恥ずかしさもあり、わからないこと、知りたいことを周りに聞けないままのことがあるので、個人的に相談できる機会を与えては（男・21）
■ 少し年上の頼りになるお姉さんお兄さんなどが（中高生からみた大学生とか）いれば、相談できると思う。相談だけでなく、雑談する中で情報を得られるといいと思う（女・25）
■ 無料匿名でかかれるクリニックがほしい！
■ ホームページでいろいろな人（医者やカウンセラーから一般の人まで）の意見を募ったもの（書き込みなど）。インターネットはとりあえずとっつきやすい。
■ 妊娠や病気については多少グロテスクでも TV や学校の授業・講演などでばんばんやってほしい。

男性はそういう情報は極端に欠如していて避妊したがらないから（女・21）

■学校に診療所。電話相談。メール相談。仲間どうして教えあうなんて悪徳商法みたいでいやだ。自然に目に入るもの（ポスター、雑誌広告、中吊り、CM）義務教育のときにきっちり教える。大学生にはけっこう知識があると思う。知的好奇心があるから。でもそうでない人あまり、知的好奇心の高くない人に伝わりやすくしたほうがいいと思う。いろいろなところでキャンペーンをはるとか。自然に目や耳に入るものがいい。

■ 病院に関しても情報源にしても、性に関する情報が正しいのか間違っているのかわからない。それを見極めるものがほしい（21・女）

■ 病気に関する種類、症状、対処法、お金や時間・期間の負担など詳しく生の声もきけるような情報源がほしい。匿名・無料のクリニックはいいと思う（女・21）

■ 情報を得る機会が欲しい。できれば直接働きかけてもらいたい。

■ポスターなどではなく、TVコマーシャル、番組、サンプル配布などがよい（女・20）

■ 学校でエイズ検査ができるといい（選択で）

■ ポスターってほとんどみたことない。効果あるんでしょうか。（21・女）

■10代向けの雑誌には殆どの子がセックスをしているような感じで書かれていて良くない。みんなそういうのに影響されて、数が多ければいい、してなければ遅れる、と勘違いする。下手なひやかしみたいなのも辞めたほうがいいと思う。・インターネットでの無料・匿名クリニック。URは雑誌の広告等に載せる（女・22）

■エロメディアの規制をするより、それに注釈を入れるようにしたり、義務教育時期の性教育を徹底するべき（男・24）

■クニが取り組むことには、とにかく慎重になってほしい。ワカモノの性はとかくもろいものに支えられているような気がします。オトナの目からみて、あぶなっかしいくらいが「健全」ではないでしょうか（男・25）

■親の保険証を持っていかなくても気楽に行ける診療所（カウンセリングも診察もしてくれるところ。）ピルの販売をもっと楽にしてくれること（女・24）

■あまりふかくは触れにくい分野、「いざ実践！」というときの段取りとかについてエンライトガたりないかもしれない。外国での例の、「仲間同士で教えあうプログラム」とかもいいと思うけど、ハウツービデオとか、パンフレットがあってもいいとおもう。「セックスとはこうあるべきだ！！」という感じになってはいけないと思うので、そこらへんも気をつけたほうがいいと思う。ゲイの人のための説明もつけるべきだと思う。避妊の仕方、病気予防の仕方はもちろんだし。もう体験してしまった人から見ればばかばかしいことだけど、初めての人からすれば気が気じゃないことだと思うし、中には失敗が大きすぎてトラウマになったり、避妊がうまくいかなかったり、不治の病になったり、たった一度の過ちで一生ものの荷物を背負いかねないのだから。教科書などで部分的、断片的に説明するだけじゃなく、具体的な説明も必要だと思う（女・20）

■若者向けの雑誌に性に関する問題や話題のページを連載してくれれば、恥ずかしいたか思わないで情報を知ることができると思う（女・19）

■パンフレットとかでは、すぐに忘れてしまうので、ほしい情報をすぐに手に入れられるようにｉモードなんかで情報を発信してくれると良いと思います（女・26）

■この前、テレビで見たのですが、外国でしたが、都会の真んなかで、「これからの性」をテーマにしたアートプロジェクトをお洒落に開催していた。権威的でなく（女・25）

■冊子配布を望みます（女・21）

■偏見や自分以外の考えや集団主義にとらわれない考え方などいろんな考えを認めていけるような様々な人が集まれる場所．居場所を作る．どんな人でも入れて、それでいて縛らない．そういう居場所が必要（女・23）

■あなた達のような自称オトナの情報集め＆売名行為の押し付けボランティアやるよりも、若者だって自然にわかるって無駄無駄（男・26）

■私は、好きな人がいて男の人の嫌なところをみせられた気がします。それは、風俗などです。なぜ、そういうものがあるのか、きちんとしりません。大人がきちんと教えてくれないと、興味をもっています。大人の人が風俗などにつれていったりしていま

す。子供たちをどうにかするより、大人からかわってもらえるように考えて欲しいです（女・19）

■無料とは行かなくても、若者がかかりやすいクリニックがあるとよいのでは（女・25）

■インターネット上のチャットなどで実際に話を聞くと、以外と避妊の方法について誤解している人が多いです。探せばインターネットにも色々な情報を提供してるサイトがあるにもかかわらず、それは活用されていないと感じます。すでにあるのかもしれませんが、今一番身近なｉモードなどに詳しく間違いのないサイトを作り、またメールマガジンやメーリングリストなど、定期的に情報を受け取れる手段があると、もう少し本当の性に関する情報が伝わるのではないかと思います。（女・26）

■避妊具のつけかた、使い方講習を学校の授業で徹底して行ってもらうく男も女も（女・23）

■低学年からの教育が必要。たとえば、小学校などで女子生徒だけに保健体育で教えるのではなく、男女一緒に教える。興味本位に走る子が多いので（特に男子）、何か考えさす授業が必要病気に対しての恐怖をではなく、共存していく方法をもっと勉強させる（男・28）

■たぶん、性に対しての真面目な視点からの事でのアンケートだとは、思っています。ただ、今の風潮というか、安易に性交渉に及ぶことが多い例が有ると思います。（もちろん、真面目な方もいますが・・・）私もそうですが、「みんながやってるからいいじゃん？」みたいな捉え方が多い気がします。もう一度、基本に戻って考えるのも良いように思われます。（とは、言っても、学校の保健の授業では、やってますけどね）　一つの提案として、逆療法というか、ちょっときついですが、妊娠や病気のなって、こんな苦労しました。というのをみなさんに知って貰うのも一つの手でしょう。（今までもありましたが、やはり、甘いと思われます）　どうしても、辛いところには目を向けづらい部分ではありますが、それによって、パートナーへの思いやりが少しでも増せばと思っていますが・・・まとまらない意見になってしまいましたが、一つの意見として見ていただければと思います。。。（こんな事を言っている僕はもう若者では無いかも知れませんね。笑）　では。。。（男・28）

■無料でかかれるクリニック、友達感覚で相談出来る場（女・17）

■仲間どうしで教えあう。・・・が一番すべてのひとに（伝わる）ことだとは思いますが、今の子供（小中学生）はこりないとわからない子供がいるので、なってからきづくってパターンが多いような気がします、だからその危険性だけでも伝えることができれば、一人の犠牲者がまわりにでてきたらだいぶ気づいてくれるのではないでしょうか？←はっきりいってこれでは遅いのですが。これでも気づかないのが現状ではないでしょうか？そういう世代だからこそ、伝えることをおこたらないと、大変なことになると思います。だから友達、パンフレットなんでもビデオなんでもよいので、危険性を伝えることさえしていれば良いと思います（男・21）

■バトルロワイヤルのように大切な作品をＲ－１５にした隠さず、オープンにしてゆくべき（女・20）

■すいません。あんまり思いつきません（男・24）

■保健の授業で実際のコンドームとかを使って授業すると良いと思う（女・21）

■街中、学校などでコンドームを配る（女・19）

■どこの病院でも無料で性に関するカウンセリングが受けられたら最高。みんながよくみる漫画（例えば週間少年マガジンとか）で簡単に分かり易く書いてくれると、みんな助かると思う。俺の周りの人も興味はあるけど難しくて良く分からないってゆ一人がすごく多い（男・23）

■気軽に医者などに相談できるシステム（女・24）

■「愛」を教える（与える）。快楽のためだけのセックスだけじゃくなるように。ストレス発散の為のセックスじゃなくなるように。これが一番だと思います（女・21）

■年が若いから、してはいけないものだ、という考え方が、そもそも、なんか良くないと思う。 不純、だとか何とか大人が言うから、隠れてやりたがるのだし、知らなきゃいけないことも聞きにくい。オープンにするべき。有名な先生を呼ぶよりは、わからない事を質問できる小人数の状況で、年の近い先輩などから話を聞くほうがききやすいかも（女・21）

■今の性の現状を踏まえながらの性教育についての授業（女・21）

5. まとめと提言

ヘルスプロモーションにおける問題の設定、当事

者のとらえ方は多様であり、固定されたものではない。これまでの実践に加えて、今後若者自身が主体的に関わるプログラムのあり方を具体的に検討する必要があるだろう。問題が「若者の」「逸脱行動」であるかぎり、アプローチは専門家モデルの中での教育・指導にとどまることになる。この場合、対象に近い専門家がどれだけ有効なスキルやプログラムを持てるかにかかってくる。もしも、問題が逸脱行動という設定をしている専門家側にあるとするならば、これまで有効でなかった原因であり「現在の問題」は、その視点から修正していく必要が生じるだろう。

すでに CAINN（The Children and AIDS International Non-Government Organization Network）はUNAIDSの協力を得て「Guideline for Children Participation in HIV/AIDS Program」を作成している。今後わが国でも若者個人の問題解決能力やコミュニケーションスキル獲得への援助を行うことで、決定や運営への若者の自発的な参加が期待される（表2）。

表2

旧来のモデル		新しいモデル
専門家モデル 問題是正モデル	問題や取り組み／ゴールの設定	若者の援助ニーズモデル 若者との協働モデル 若者主導のモデル
専門家が行う	プログラムの内容の選択／決定	若者が選択や決定に参加する
専門家／トレーニングされた大人が行う	プログラムの運営	若者との協働 トレーニングを提供された若者が参加する 若者自身が運営をする
専門家、疫学などの統計データ	プログラムの評価	評価への若者の参加

文献

1）広井良典;ケアを問い直す, 106-115, ちくま書房1997,

2）野原忠博;住民参加の課題と展望, 健康教育・保健行動, 101, 有信堂, 1993

3）福田吉治;医療におけるコンシューマーリズム, 日本保健医療行動科学会年報Vo.11, 254-256, 1996

4）宗像恒次;医療・健康心理学, 117-120, 福村出版, 1989

5）Robert Chambers; Whose Reality Conuts?, Intermediate Technology Publications, London ,1997

6）キャロライン・モーザ; ジェンダー、開発、NGO-私たちのエンパワーメント
新評論, 1996

7）信田さよ子;アディクション・アプローチ, 医学書院, 61-66, 1999

8）久繁哲徳;医療システムの転換と経済的評価, 保険診療, 50, 21-26, 1995

9）Joanna E. Siegel, et al; Recommendation for Reporting Cost-effectiveness Analyses, JAMA, 276, 16, 1139-1341, 1996

10）Andrea Cornwall, Rachel Jewkes; Participatory Research, Social Science and Medicine, 41. 12 , 1667-1676 , 1995

11）Orland Fals-Borda, Mohammad Anisur Rahman(ed), Action and Knowledge; Breaking the Monopoly with Participatory Action Research, Intermediate Technology Publications, London, 1991

12) WHO; Alma-Ata 1978, Primary Health Care, WHO, Geneva, 1978

13) WHO; Otawa Charter for Health Promotion, WHO, Geneva, 1986

11）山本直英;性的自己決定能力を育む性教育, ＜性の自己決定＞原論, 紀伊国屋書店, 47, 1998

12）立岩真也;空虚な～堅い～緩い・自己決定, 現代思想, 26-8, 57-75, 1998

13) HIVInSite http://hivinsite.ucsf.edu

14) Arnold W.; Peer Education Program Reaches

High Risk Adolescents with AIDS Information and Prevention, International Conference on AIDS, 1989 Jun4-9, abs.T.D.0.26

リプロダクティブ・ヘルス／ライツを若者の視点から考える

研究協力者　長沖暁子（慶応義塾大学経済学部助教授）
池田譲・小川峰貴子・上村大輔・柳川麻紀子・本間宣行（経済学部２年）・国分泰子（同法学部２年）

若者の視点から「思春期のリプロダクティブ・ライツ」に対して提言するというテーマで、慶応義塾大学で私が担当している自由研究セミナーという授業を履修している学生に協力を求めた。最終的に出てきたレポートは、例えば具体的な「望まない妊娠対策」など、直接行政、学校に対する提言からは外れた部分も少なくない。しかし、個別のテーマのみで解決できるのではなく、総合的に考えなければ、望まない妊娠も避けられないという観点からこのようなまとめになった。

＜思春期という言葉を廃語に！＞

彼らがまず口にしたのは「思春期」という言葉への疑問だった。「思春期という言葉を聞いても、実感がない、他人事のように聞こえる」、「自分は思春期ではないと考えている世代が使う言葉ではないか」、「確かに多感な時期なのかもしれないが、タブーのように扱われることが多い気がする」、「なんでも性と結び付けられて考えられているようで嫌だ」など、当事者にとっては思春期という言葉自体が「おとな」による若い世代への無理解・決めつけの象徴のように思われている。

思春期という言葉を使うことによって、おとなたちはこの時期にどのような意味を与えようというのか？　そもそも思春期がどの年齢層を指しているのかも曖昧だ。

確かに、性的には成熟しているが、社会的・経済的には自立できていない時期が「思春期」といえるだろう。しかし、この時期の人間にとって重要なテーマは性／リプロダクティブ・ライツだけではないのに、「思春期の問題」として春＝性だけが大きくがあげられてしまうという不信は大きい。

では彼らが実感できる呼び方は何なのか。三つの方向性が考えられた。

・思春期に代わり、自己発見、探索、開発など自分を確立していく時期という意味をもつ前向きな言葉を作る。

・ティーン、中学生、高校生など、時期、立場を明確にした言葉。

・adolescent は青年期という意味であり、青年期がよい（青春期というのも爽やかでよいかもしれない）。

新しい用語を作ろうと考えたが、結局ぴったりする言葉は思いつかなかった。現状で、当事者にとって一番しっくりしていて、抵抗がないのは「ティーン」といえるようだ。

＜人権・ジェンダー・性教育の専門授業・専門教員の配置を！＞
＜実践的な性教育を！＞

今までの性教育は役に立ってこなかった、というのが共通する意見だった。だから、雑誌、ビデオや、友人同士の会話の中から得た中途半端な知識で、避妊やセックスを実践することになる。もっと避妊・中絶や感染症予防について具体的に教える実践的教育でなければ意味がないと言える。

と同時に、知識だけでは不充分であることも現実だ。性に関してフランクに語れない環境の中で育ち、自分に自信が持てなかったり、女らしさ、男らしさの枠に縛られ、知識を持っていても実際には行

動できないことも多い。

性教育の基本として、一人一人の個人が大切な存在であり、自己決定権を持っていること、自分がいやなことにはNOと言って良いこと、自分を大事に思うのと同じように相手の人格も大事にするという人間関係が身についていなければ、知識は絵に描いた餅にすぎないことになる。特に現状では、女性が女性であることに誇りを持てること、自己主張できるようになることが不可欠だ。

このようなベースがあることが、虐待・性暴力・買売春といった問題の解決や、メディアと向き合うための力にもなるだろう。

そのためには教師自身が偏見や差別から自由でなければならず、教員への人権・性差別・ジェンダー研修は必須だ。

最初の座談会の中に出てきた性だけでなく、喫煙・飲酒・麻薬・人権・ジェンダーなど生きていく上で重要なことを教える「ゆとりの先生」には二つの意味がある。一つは性教育をある意味で人権教育などの一つとして総合的枠組の中に位置付けること。もう一つは、それを専門とする教師がいることで、生きていく上で重要な科目として子どもの頃から認識できるようになり、性に関してフランクに語れる環境も整うこと。

そして、この専門とする教師が次に述べる相談をも担える存在になれれば理想的である。

＜ホームページを使った相談サイトへの支援を！＞

＜同じ経験を経てきたピア・カウンセリングへの支援を！＞

教育で学ぶことが、普遍的知識だとすれば、現実的な場面で起きたことの具体的な解決に必要なのが「相談」ということになる。現在、多くの若者にとって相談相手は友人だ。現存の相談業務に彼らは期待してはいない。自分たちのことを認め、受け入れてくれるとは考えていないからだ。

相談には正確な情報を得ることと、自分の悩みを解決し、生きる方向性を決める、ある意味で精神的な部分をケアする二つの側面がある。精神的なケアに関して、ピア・カウンセリングの重要性はすでにさまざまなところで指摘されているが、単に若者にという条件だけでなく、「同じ経験を経てきたもの・同じ悩みを抱えたもの」という点が重要だ。

提言２の中にあるホームページの利用は両方の側面を兼ねることができ、なおかつ一番実現可能性が高いものだろう。提言の中に心配されているように「ありうべき若者像」から、このようなホームページへの政治的・思想的介入をせずに、国や企業が支援し、広報していけるかどうかが成功するかどうかの鍵になる。

ホームページだけでなく、学校の中に「ゆとりの先生」のような存在があり、地域の中にピア・カウンセリング機能をもった組織・ＮＧＯなどあることによって、直接的な相談も可能になる。これも国が支援・育成することが必要だ。

そして、上記の教育、ホームページ、ピア・カウンセリングなどが個別に存在するだけでなく有機的にリンクすることこそ必要だろう。

大学生と私の間で、選択や自己決定という概念に差があることを感じた。それは、例えば、買売春を自分で選択してやるならいいのではないかというような発言に代表される、社会背景から切り離されて個人の選択が存在するかのような考え方が若い世代にかなり浸透していることだった（ある意味で他人のやることには干渉しないという無関心の現われでもあるが…）。かといって、彼女たち、彼らが社会的制約や偏見、差別から自由であるかといえば、そうでもない。

リプロダクティブ・ライツや自己決定権を、社会的整備の不備を自己責任に転嫁する免罪符としないためにも、個人の意識や考え方がどのように社会的影響を受け、どのような力関係の中で個人の選択が行われていくのかということまで視野に入れた教育が必要であり、それを明確にするためにも、ジェンダー教育の必要性が浮かび上がってきたと考えている。

１：座談会「リプロダクティブ・ライツ：１０代に伝えたいこと・・・」

Ａ（♂）「今日はどのようにしたら１０代にリプロダクティブヘルス・ライツがうまく伝わるかについて、思うんだけど何かいい方法はあるかな？」

B（♀）「そのことよりも、SEX の低年齢化の問題から話し合うべきじゃないかな。」
C（♂）「どうして？」
B（♀）「性と生殖の権利をうまく伝えるには、まず、今若者の性について起こっている事を把握して、その問題を考えなくてはならないと思う。」
D（♀）「実際に低下しているのかな？」
E（♂）「していると思うよ。マスコミでも問題になっているし、自分の経験からもそう思う。最近では中学生で SEX していて珍しくないし、小学生ですら早い人はしているよね。」
F（♀）「でもそれはマイノリティーで、昔でもいたんじゃない？」
E（♂）「それでも昔よりは増えてると思う。いや増えてるよ。」
A（♂）「じゃ、増えていると仮定しよう。でも低年齢化の問題で騒いでるのは当の本人達より、大人達だよね。どうしてかな？」
B（♀）「それは戦後の文化、いわゆる貞操・純潔というものが今の大人達の意識に潜在しているからだと思う。」
C（♂）「それなら、そんなに問題ないんじゃないかな。時代の流れでさ、大人達の頭が硬いだけじゃない？」
E（♂）「それは違うよ。低年齢化はやはり大きな問題を抱えてる。別にやりたければやればよいという安易な考え方はよくないよ。」
D（♀）「私もそう思う。避妊の知識もあまりないのに、SEX をすれば妊娠してしまう。社会的にも経済的にもつらいから中絶をする。中絶は悪い事ではないけど、身体的のも精神的にも傷を負うことになる。しないに越したことはないじゃない。だから知識がないのに SEX はよくない。」
B（♀）「妊娠だけじゃないよ。STD の予防や、STD に対する知識も必要だよね。クラミジアなんてあれだけ広がっていて、しかも自覚症状がないでしょ。これは知識のない若者達の SEX に関して大問題よ。」
F（♀）「何か起こらないように予防できない、何か起こっても何もできないカップルは SEX するのはよくないね。」
A（♂）「単純にダメだとは言えないけど、責任がとれない人達は、というか問題になっているのは責任がとれないからだよね。でもどうして低年齢化が進んでいるのだろう。」
E（♂）「それはさっき B さんがいった戦後の文化が薄れつつあるからでしょ。」
D（♀）「それは根本的でないと思う。文化が薄れた理由があるでしょ。」
B（♀）「それはメディアの影響が大きいと思う。性に対して誇張した表現などで、拍車をかけているのではないかな。」
C（♂）「エロ本とかアダルトビデオとか簡単に見ることができるしね。」
A（♂）「きっとたくさんの要因があって、こうなったと思う。もちろん時代の流れ、社会の風潮も含めて。じゃ、これからどうすれば改善するかな。具体的な解決策はないかな。」
F（♀）「トイレに貼り紙したらどう？」
C（♂）「コンドームつけろって（笑）」
E（♂）「それっていいアイデアだと思う。効き目あるんじゃないかな。」
B（♀）「やっぱり性教育の充実を図るべきじゃないかしら。教育をするのが一番近道でしょ。」
D（♀）「どこまで話せばいいのかな。恐怖教育にもなりかねないじゃない？」
B（♀）「そこが難しいのよ。STD 教育で実際に感染した性器の写真を見せるのが一番影響がある。でもそれは SEX に対して恐怖を植え付けることにもなってしまう可能性があるのよね。」
A（♂）「個人の受け入れ方だから、とても難しい問題だよね。恐怖教育云々の話は。ただ、今の教育のシステムでは明らかに遅れている。改善しなければならないと確信している。恐怖教育とリアリティーのある教育とどこで一線を引くかは、とても難しいけど、やはり実践的な教育が必要だよ。」
D（♀）「教育者の変化、改善が必要、それと国がもっと柔軟になること。」
E（♂）「学校教育の中にもっと性を取り入れるべきだよ。」
B（♀）「そうね。でもどこでどうやって取り入れるの？　今も性教育の授業はある。でもあまり効果がないのが現実でしょ。どうすればいいのかな。」
F（♀）「様々な科目の中に性を取り上げればいいんじゃない？　英語のトピックに性、理科の中に生殖をいれたり。」
A（♂）「それはひとつの方法だけど、そんなに改

善されるとは思えない。たとえば生徒は英語の先生が性のトピックを使って授業をしたところで、それは英語の授業、そして英語の先生なんだ。学校教育とは日常にの大部分を占めていて、当たり前になる。つまり小さいころから、性教育を含んだ授業があり、そのための先生がいることが必要なんだ。そうすれば性は身近に感じる。僕らが国語や算数を当たり前と感じるようにね。そうすると、もっとフランクに性について相談や、話し合いができると思うんだ。そうだ、ゆとりの時間を活用しよう。「ゆとりの先生」をつくるんだ。その中には、性はもちろん、妊娠・中絶・喫煙・飲酒・麻薬・人権・ジェンダーといった生きて行く上で、とても重要なことをたくさん取り入れるんだ。これこそゆとりだよ。」

全員「それいい！A 君その先生の第１号になれば！！！」

A（♂）「おっと・・・」

****

G（♀）「具体的に高校でリプロダクティブヘルス＆ライツについて話してほしいという依頼がきているんだけど、自分が話すとしたら、何を話せばよいと思う？」

C（♂）「自分の体験をもとに、家族の役割について話したい。思春期の問題って、性ばかり言われるけど、僕にとっては家族の問題の方が重要だったよ。」

B（♀）「そうかな、やっぱり避妊の話が必要だよ。そもそもリプロについての依頼なんだよ。去年話を聞いた、３年間、避妊法について話し合ったカップルのこととか、シングル・マザーとかの話をしたいな。」

F（♀）「そうだよね。避妊の話が必要だよね。いま産むとどうなるか、産むというのも責任だし、おろすというのも責任だと思うし…。」

B（♀）「ホームページ見てたら、中絶を体験した女子高生が作ったホームページがあって、もうすごいんだ。ぜひみんなに聞いてほしいの。読んでみていい？」

◆男の人へ。（http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Hinoki/6983/より）

「避妊について真面目に考えたことありますか？男の人って、自分が妊娠するわけじゃないから、軽く考えすぎだと思うんです。私の彼もそうでした。中だししてみたいとか、男の人って好奇心がすごいよね。女のことは考えないで、割と自分の欲求を貫くってかんじで。私は避妊をいやがっている男とか、避妊を軽く考えてる男がいたら、私はあなたの人間性を疑いますよ。男にも女にも、望まない妊娠するって辛いよ。中絶まっしぐらってことは。お金も要るし、赤ちゃんを殺すことだからね。男はいいけど、女は一生赤ちゃん産めないことになる可能性が高いんだよ？　女の一生はあんたの軽い避妊観で変わるんだよ。責任だって一生女に追及されるんだ。お前のせいだ、って。でも、あなたがちゃんと避妊をしなかったら、当然のことだよ。あなたが悪いんだよ。責められて当然。責任とって当然。何を言われても文句は言えないはずだし、一生死んだ赤ちゃんに懺悔しなきゃいけないんだよ？　もしあなたが妊娠という責任を負うことが嫌なら、避妊するしかないんです。避妊の多くは男性主体です。コンドームなんかはそうだよね。男性の協力がないとできないんです。ゴムなしの方が気持ちいいとか言ってるあなた。その気持ちはわかります。誰でもそうだよ。でも、それは無責任だよ。責任が取れないなら、避妊してよ。避妊しないHでどうなるかは考えればわかること。あなたは一瞬の快楽を選ぶんですか？人の命のことなんて、考えられない人間ですか？　100％の避妊なんてありません。でも、最善の努力で、それを 100％に近づけることで、私達の将来が明るくなります。女の人も。男の人に避妊を頼むことは恥ずかしいことではありません。むしろ、かっこいい女だと思います。私は、自分の体を自分で守れなくて、傷つきました。でも、それは自分のミスです。怒りの矛先は自分なんです。くやしいです。もし避妊をためらって妊娠しても、あなたが苦労するだけです。最後に損するのは女です。絶対に。あなたが妊娠しても、中絶することになっても、彼にあなたの気持ちはわかりません。男は逃げられるから、逃げるかもしれません。わかってくれと言っても無理です。わかってくれても、あなたの体は、赤ちゃんの体は傷つくんです。産めないとわかっているなら、避妊してください。私からのお願いです…。」

（続けて、その彼ー家庭教師らしいーの台詞）「カ

コのことなんだから、仕方ないだろ。今更、なんで中出ししたのとか言われても、もう済んだことだろ。うるせぇんだよ。おまえが産むって言って、おまえの親とか俺の親にバレたらどうするんだよ。俺、せっかく苦労していい大学はいって、夢を実現しようと思ってたのに、もしおまえが子供産むとかいうことになったら、俺は学校やめなきゃいけないんだよ。俺はお母さんに迷惑かけたくない。それに俺19だしおまえ17だよ。おまえは親の同意がないと結婚もできないし、そんな簡単にいかないんだよ。おまえが考えてるほど世の中甘くない。」
「なんでおろすって一言が言えないんだよ！」

一同、憤慨！

C（♂）「そんな奴、いるんだ？」

B（♀）「いるんだよ。びびるってゆーか普通にいると思うよ。自分がそうなったらわかんなくない？スゴイ憤りを感じる。だから私、中絶した場合とか、一人で生きてこうと決めた子の話をしようと思ってる。」

A（♂）「自分だったら、ある友人から相談をうけました･･･というような会話形式で、避妊、性感染症について入れようかな。で、一番大切なのは女性が自己主張して社会を変えていくことが必要ということだと伝えたい。」

D（♀）「私、昔は、男の子になりたいと思ってた。でも今では女性である事に誇りを持てるようになった。だから、自分を好きになろう、そして他人を思いやれる心のゆとりを持てる素敵な女性にろうというようなことを話したいな」

E（♂）「自己決定権についてかな、身近な例をあげながら…。でもうまく説明できないや。」

G（♀）「じゃ、来週までにそれぞれ原稿書いてきて、来週全員が発表することにしよう。」

****

B（♂）「なんかさ、今日の話聞いてると、妊娠しちゃいけないみたいだよ。運の悪い出来事みたいじゃん。」

A（♂）「ある意味、運の悪い出来事じゃん」

B（♀）「だって望まない妊娠の話だから。高校生だよ。望んでるのに産めないカップルの話だってたくさんできると思うよ･･･」

2：「Reproductive Rights」　講演記録

講演―1　柳川　麻紀子

みなさん、今まで誰かを好きになったことありますか？　今、みんなは女子高にいるからなかなか男の子と接する機会は無いかもしれないけど、きっと今までに小学校の頃とか近所の男の子とか、たくさん接する機会はあったと思います。その中で一緒にいて楽しい、もっと話したいと思った男の子いませんでしたか？

人を好きになるのは人間として当たり前のことだし一緒にいたいと思うのも自然なことです。始めはただ目が合うだけで嬉しい、話せるだけで幸せだと感じるかもしれないけどやっぱり女の子だったらその人の彼女になりたい、その人と付き合いたいって思うよね。じゃあ、仮にその人と付き合い出したとします。最初は電話したりメールしたり。デートしたりして彼女の気分を満喫するかもしれないけど、そのうちその人とキスがしたい、ＳＥＸがしたいって思うようになるかもしれないよね。みんなの中にはそんな事を考えるのは男だけ、女が考えるのは恥ずかしい事だって思う人がいるかもしれないけど、でもそれは男も女も関係無いんだよね。好きな人と触れ合っていたいと思うのは自然なことだし、女の子がそういう事を考えるのも特別な事じゃなくて普通のことなんだよね。じゃあ、キスはまだいいとして、ＳＥＸするとなるとどうでしょう。絶対に忘れてはならないことがあるよね。そうです、避妊をするという事です。

ちょっと今想像してみてください。今みんなに子供が出来たらどうしますか？道としてはもう２つしかないよね。１つはその子供を産んで育てること。そしてもう１つは中絶、つまり子供を堕ろすことです。

今はみんなくらいの年代の女の子が子供を産むっていうのも決して珍しいことではないし、好きな人の子供を育てられるってことは女として幸せなことなのかもしれない。そういう道を選ぶのも私はアリだと思うし、それによって幸せになってる人はきっとたくさんいると思う。けれど実際今みんなに子供が出来たらどうですか？　産んで育てる自信ありますか？　子供を育てるっていうのは本当に

大変なことだと思うんだよね。今みんなは高校生で親から金銭的に援助をしてもらっている状態だから経済的にも自立してないよね。それに今みんなの中には大学とか将来の仕事とかいろんな未来予想図が描かれてるんじゃないのかな。中絶するにしたって決してプラスになることではないし、しなければそれに越した事はないよね。私はその夢を達成するためにも避妊というのは必要不可欠な物であり、絶対にしなければいけない事だと思うんです。

みんなは避妊方法をどれくらい知ってるかな。まずピルって言葉知ってるかな。これは薬のことでちゃんと服用すればかなり高い率で避妊することが出来ます。でもこれは産婦人科に行ってお医者さんに診察してもらわないともらう事は出来ないし、それに費用もかなりかかります。みんなは今一番カップルが利用している避妊方法は何だと思いますか？もうみんなわかるよね。それはコンドームです。これは価格も安いし、薬局とかで簡単に手にいれることが出来ます。身体的にも特に問題はないし非常に利用しやすい避妊方法であることは確かです。けれどこれには１つだけ問題があるのはわかるかな？　コンドームって男性主体の避妊方法なんだよね。だからいくら女の子が避妊したいと思っても男の方が嫌だと思えばこの避妊方法は成り立たないんです。

みんなは自分の好きな人に避妊して欲しいと言えますか？　言えませんか？　みんなの中にはもしかするとそんな事言ったら嫌われるかも、とか女から言うのは変だと思ってる人がいるかもしれないけどそんな事は決してありません。結局自分の体を守るのは自分しかいないんです。それは親でもないし、友達でもない。彼氏でもないんです。自分の体を守るためにも、そして自分の意志を尊重するためにもとにかく自分の気持ちをしっかりと相手に伝える必要があると私は思います。

私はまたそういうことについて真面目に語れる関係こそが本当の恋人だと思うし、それが出来ないようだったら付き合う意味もないんじゃないかな。互いのことを思い合えるんだったら避妊というのは絶対に可能なことだよ。

さっきも言ったけど自分の体を守るのは自分しかいないんだよ。子供が出来るのも自分だし、産むのも自分。堕ろすのも自分。傷つくのは女の子の方なんだよね。私は自分の体を大切にして欲しいし、またそうするべきだと思う。それは現在のことだけじゃなくて将来にもつながることなんじゃないかな。

とにかく自分を大切に、目先のことばかり考えないで将来のことも見据えて行動して欲しい。そして女性として誇りを持って自分のするべきこと、進むべき道を貫いて欲しいと思う。自分の意見、意志を尊重してぜひ素敵な女性になって欲しいと思います。

講演―2．　国分　泰子

こんにちは！

今日高校生のみなさんに何話したらいいかな、って　いろいろ考えたんだけれど、実は高校生と大学生っていっても、年は近いんですよね！　私は２月生まれだから、19 歳、今まさに最後の 10 代を満喫中、といったところなんだけれど、たぶんみんなとそんなに変わらないと思う。この中には私よりずっといろんな経験してきた人も多いんじゃないかな。

でも、私がみんなに伝えたいこと、これだけは自信もって言えることとして、この二つだなって思いつきました。

自分のこと好きですか？

今好きな人いますか？

私は、大切なのってシンプルにこの二つだと思ってます。

まず、自分のこと好きですか？こう聞いて、自分が一番大事、自分のことが一番かわいい、そんなのって当たり前って　思うかもしれないけれど、でも本当に自分自身を大切にできてるかな？

次、好きな人いますか？

もしつきあってる人がいるなら、その人のこと本当に好きって言える？彼氏じゃなくてもいいし。誰かいいなって思える人、あこがれる人、一緒にいると楽しい人、今の自分にいますか？　同性だっていいと思うんだ。会いたいなと思う人、もっと話したいなという人、一緒に何かやりたいと思える人、いませんか？

今日紹介してきたのはリプロダクティブ・ライツという概念なんだけど、これは re-produce 再び作り出す、生殖する、という単語から来ていて、“性

と生殖に関する権利”という意味。これは、女性として、子どもを産むか産まないか、妊娠するかしないかにとどまらず、そもそもsexするかしないか、というところでも自己決定権を持つこと、ってされてます。広い意味で言えば、自分自身のことについて自分で決めていく権利のことなんです。自分で価値観や好みや生き方を選んで生きられることが本当の女性の自由だというわけ。

そこでまず、一つ目の質問。

自分のこと好きですか？

46 時中向き合ってるわけだから、当然自分のいやな面ってたくさん見えてくるもんだよね。でも、自分で自分のここは好きって言えるところある？自分で自分を認めてやること、どっかで自分に自信を持てることって、結構　大切なんじゃないかな。

多くの人は何かしら悩みを抱えながら毎日を過ごしてると思うけれど、たとえば、学校に行きたくなくなっちゃうとか、親とうまくいってないだとか、食事がきちんと取れなくなってしまったりとか、問題を抱えて苦しんでる人もいる。人って意外と弱い存在なんだよね。ちょっとしたことが原因でも、はりつめていた糸が切れてしまうこともある。心の問題って難しいよね。

でも、今取り立てて大きな問題を抱えていないという人も、普段から自信を持って、強く生きようとする姿勢が大事なんだと思う。自分で選んで決めていくこと、自己決定権が、まさに　さっきも紹介したリプロダクティブ・ライツにつながってくるんです。

自分のこと好きですか？　それに加えて、女性である自分のこと好きですか？

みんなと同じように、私も女子校育ちで、中高6年間過ごしてきたわけだけど、私は最初、男の子に生まれたかったって思ってたんだよね。まぁ、このままだと、あまりにも運動神経の鈍さに問題があるから、せめてそこを改善するとして、生まれ変われるならスポーツのできる少年がいいなぁ、なんて。単純に男同士のさばさばした友情、というものに憧れてたこともあるんだけれど、女であることに何かと不便を感じて、女ってめんどくさい、って思ってた。朝の満員電車では毎日のように痴漢に会うし、体育の前後で着替えるのだって男の子よりずっと手間かかるし、もちろん月経もあるし。“男の方が楽チンだし、得だよ、絶対。”って思うことあるよね。

もしかしたら、自分のお母さんも含め、年上の女性からこんな言葉聞いた事ないかな？

“気をつけなさいよ。損するのはいつだって女なんだから。”って。これって、男女の関係でも妊娠するのは女性だから、“自分の身体を大事にしなさい”、というメッセージなんだろうね。でもネだからって、“損するのはいつだって女、女はいつも被害者なんだ。”っていう意識は持たないでほしいと思う。

たしかに、今の社会では女性のほうが損な面は少なくないかもしれない。たとえば、就職に不利だとか、仕事を持っても男性よりお給料が安いとか、結婚すれば女性が仕事を諦めて家庭に入らなくちゃいけない、とか。でも、そうした現実を知っておくことと、自分から被害者意識を深めてしまうこととは、別。

女性に生まれたことを一生ひがんで生きるのでなく、せっかく女性に生まれたんだから、って今の私は思います。どうせなら毎日を楽しく、女性として誇りを持って生きていきたい、だって、自分の人生なんだから。

ところで、ちょっと話が変わるんだけれど、――“最近　困った虫が増えてます”って車内広告、知ってるかな？（（笑）あれ面白いよね。）その中に、“自己虫”ってのがいるんだけれど、世界は自分中心に回ってるかのように、常に自己中心的なわけ。これは　最低限の公共マナーを呼びかけた広告なわけだけれど、でも、ホントに　社会生活において、自己虫になってしまうかどうかのバランスって、ある程度自分を大切にした上での周囲への気配りだと思うんだ。そこで、――自分を大切にする、その次に大事になってくるのは、自分以外で誰か思いやれる存在がいるかどうか。

ここで、二つ目の質問につながってくるんだけれど、好きな人いますか？

人それぞれ、考え方も価値観も人とのつきあい方だって、違うよね。

ここでちょっと言っておきたいのは、男の子とつきあうことにしても、sexの経験にしても、早いとか遅いってこともないし、個人差があっていい。周りはみんな・・・、とか、自分だけ・・・とか、他の人と比べて気にすることなんてないよ！　うわ

さに振り回されて不安になることもあるかもしれないけれど、これっていう基準はないし、一人一人のペースでいいわけだから。

で、本題に戻ると、今好きな人いますか？という質問。

ここでもまた、女性自身も性をめぐって主体的に関わっていくこと、つまりリプロダクティブ・ライツが肝心になってきます。今つきあっている人と性についてもちゃんと話し合える関係かな？　今特定の人がいなくても、ちょっと心にとめておいてほしいんだ。これからつきあう人と自分から話が出来るかな？　個人差はあっても、誰もがいつかは向き合う問題だと思うから。

具体的に言ってしまえば、二人の仲で、sex をするかしないか、するとすれば、避妊法はどうするのか、コンドームか、ピルも使うのか。自分たちの行動から起こりうる結果も当然考えなくちゃいけないよね。もし子どもが出来たら、どうする？　産むのか産まないのか？　自分たちで育てられるのか？　学校をやめて働く？　でも、まだ　やりたいことだってたくさんあるよね。私もそう。もし今子どもはちょっと・・・って思うのだとしたら、それなりの予防措置をとっておくべきだってことになるよね。まず、二人でしっかりと話し合うこと。sex について、避妊法について、２人の関係について。それが自分の身体を大切にすることでもあるし、相手を思いやるってことにもなる。相手に任せっきりにするのでなく、自分も主体的に関わっていくこと。だって、二人の問題なんだから。

それには、きちんと話し合えるようなパートナーを選ぶ、ってことも大事なんじゃないかな。

今　好きな人いますか？　という質問。

これって、今実際つきあってる人がいるかどうかじゃないんだ。それにはタイミングもあるし、時間の問題もあるし、個人差がある。それより、自分から好きと思える人がいるかどうか、自分にとって思いやれる人の存在なんだよね、大事なのは。ふとしたところで、他人を思いやれる心のゆとり、持っていたくないですか？―好きな人が出来ると、自然と人が○くなる、って言うよね。これ不思議な事に、その相手だけじゃなくて、まわりへの人当たりも良くなってくるんだよ、きっと。同性、異性を問わず、人付き合いって生活の基本だもの。私は大切にしていきたい、って思ってます。

自分で自分の生き方を決めていくこと、自分の人生を大切にすること。

そのために、まず自分を好きになる、

そして、他人を思いやること。

この二つだけ常に心に持っていて下さい。そうすれば、みんなますます魅力的な女性になれること、間違いなしだって、思います。

講演―3．　小川　峰貴子

こんにちは。今日は、皆さんと同世代の人間として、私たちにもっとも身近な Reproductive Rights & Health と、避妊の重要性　についてお話したいと思います。

《望まない妊娠》

さて、皆さんは「望まない妊娠」　という言葉を聞いて、どんなイメージをもつかな？　想像しよう！！　自分のおなかに、もう一人の人間がはいっている。すごいことだね！　いろんな考えの人がいていいと思うけど、私は、…せっかく女に生まれたのだから、「妊娠」という女だけの特権を使ってみたい。でも今は？！ちょっとカンベンって感じだよね。そういう妊娠を、「望まない妊娠」と呼ぶのです。…あまり幸せな響きを持たないね。しかし、SEX には妊娠が付きまといます。するからには、いくらでもありえる話です。

なぜ「望まない妊娠」が起こってしまうの？　理由は二つ。

1　避妊したけれど失敗した。これはしょうがない。100％安全な避妊法などないのです。

2　避妊できなかった。これは大問題です。

プリントを見てみよう。気になることがひとつあります。２の理由として、「避妊をいいだせなかった」をあげているのは、女の子ばかり！「だって嫌われるかも」「遊んでると思われそう」…こういう女の子が不幸になってしまう。自分の彼氏、自分の体なのに！！こんなんじゃ、だめ。人任せはいけないよ。

《万一、望まない妊娠が起こったら》

想像しよう！道は２つ。「産む」か「産まない」か。「出産」か「中絶」か。どちらの選択肢もえぐい

よね。どうしたらいいんだろ？！どちらがいいとか悪いとかはない！！自分が「こうしたい」と思って選んだ道が、最善の道なのです。どちらも選択肢として平等であり、どちらの決断を下すにしろものすごい勇気が必要なのはわかるよね。つまり、どちらの道を選んだとしても、その女性は立派に苦しみを乗り越えている。勇気ある決断を下した人を、「責任感のないだらしない人」「罪のない子を殺して…」みたいに言うのは絶対にいけないことだ。罪のない、勇気ある女性に罪悪感を与える発言。ひどいよね。

とはいえ…若い女性、特に、成長段階の１０代の女の子にとって、中絶は危険です。手術であるため、少なからず体を傷つける。後遺症の可能性もある！将来子供が生めなくなってしまうこともある！しないにこしたことはないのです。

では、どうしたらいいのでしょう？　だから、避妊をしっかりする必要があるのです。

《避妊の重要性》

プリントを見てみよう。さまざまな避妊法がある！　みんな知ってたかな？　女性が管理できないものばかり！　気付いた？　女の体のことなのに、実は、理不尽な話です。今ピルが注目されている！　プリントを見てみよう！　99 年９月解禁になった薬で、毎日定量を、同じ時間に飲みつづければ、９割近い成功率で避妊ができる、という薬です。

ピルにも「メリット」「デメリット」がある。

メリット…生理がなくなる→生理痛、貧血の軽減？！ニキビ・無駄毛が少なくなる？！　　なんだかありがたいね！　でも、ここで一番注目されているメリットは、「男性の協力が要らない」「女性が避妊の主導権を握れる」という点です。

もちろん、問題点もある。

デメリット…副作用、特に喫煙者。心筋梗塞、めまい、吐き気、頭痛、体重増加？！当然個人差はありますが、問題なのは、「デメリットを受けるのは女性だけ」という点です。さらに、「女性が管理できる」の裏を返すと、「女性が避妊失敗の全責任を負わされる」可能性アリ。そして、自己防衛の手段となってしまう。避妊を言い出せない、言っても協力してくれない。ならば、私が黙って飲めばいい。これではこまります！！

「つきあう」とは、二人の問題。避妊の会話がその「二人」の間から消えてしまうのは危険、せっかくのピルの利点がいかせないよね。

《ピル使用の実例》

では、どうしたら利点をいかせるのだろう。実際にピルを避妊法として選んだ二人のエピソードを紹介します。彼女がピルに出会ったきっかけは生理不順の治療薬として、そして副作用は全くなし。よく知っている薬だったし、服用に抵抗がなかった。彼氏は彼女が納得できるまで、SEX は３年待った。「避妊法は何にするか」「その費用はどう受け持つか」「万が一子供ができたら？」などなど、すべて話し合ってから、と決めたら、３年かかったらしい。です。すごいね！！いまでも二人仲良くクリニックに通ったりしているそう。

でも、ピルには年数万円のお金がかかる。性病予防はできないから、浮気などしたら自己申告しなくちゃいけない。こんな、お互いオープンなふたりだからこそ、ふさわしい避妊法かもしれない。ある意味理想なんだよね。

でも、「ピル」が一番！ってことを言いたいのではないのです。

《幸せな二人のために》

いろんなカップルがいていい。それぞれのカップルにそれぞれの付き合い方があって、それぞれの避妊法があっていい。各パートナーシップにあわせて避妊法を選べばいいのです。話し合い、模索の結果がなんであろうと、かまわないのです。大切なのは、「話し合う」こと！！そのためには、男性の協力不可欠です。

そして、あなたがきちんと意見を言えるかってことが重要。

自分をしっかり持とう！いま、パートナーがいる人も、いない人も。幸せな二人のためには、「する」「される」の関係ではいけません。ふたりで「する」こと。付きまとう「妊娠」「出産」「中絶」、みんな自分の体にかかわることです。そんなムードのない話切り出したら嫌われる？！ほんとに妊娠したらどうしよう？いろんな不安を、ひとりで抱えていてはダメ！分け合えてこそ、恋人だよ。100％楽しめなくなってしまう。

《まとめ》

体は自分のもの、関係・パートナーシップは二人のもの。これからの女性にとって、大切なことです。わすれないでね。

3：リプロダクティブ・ライツへの提言

提言―1　教育　　池田　譲

私達（２０歳前後）は丁度「性教育」がスタートした時に小学生であった。

1、当時受けていた教育

教科書には絵で男性器や女性器が載っており、各部の名称や構造が書いてあった。また、妊娠のメカニズム・月経・射精・自慰なども書いてあった。その他には、エイズに関する知識や、避妊の仕方、男女の在り方なども書いてあったのも記憶する。当時の教科書を眺めればよくわかる。確かに必要な知識を学んだ。しかし、もしSEXをするときに役に立つ知識は、HIVに感染しないようにするためにコンドームをするということぐらいではなかろうか。つまり実践的な教育はほとんど受けてこなかった。

2、僕達は・・・

そんな中、中学生ともなれば、付き合う人達も増え、手をつなぎキスをする人達もでてくる。その中では「SEX」を経験する人達も少数かもしれないが出てくる。少なくとも自分の周りにもいたし、実際に自分もそうであった。そしてこの「SEX」の仕方をどこから覚えるかというと、友達との話・雑誌・アダルトビデオなどである。しかも、自分なりに想像を膨らませてしまい、正しい情報もないため間違った行動をとることもあるる。

3、その結果

このような状況の中SEXをするとき、コンドームが正しくつけられますか？　STD予防は大丈夫ですか？　避妊は大丈夫ですか？　妊娠したときの責任はとれますか？　答えはすべてNOではないでしょうか。アダルトビデオでSEXをみようみまねでしてしまえば、コンドームをせず、膣外射精で避妊はOK、しかも精液を女性の顔にかけるような間違ったSEXをしてしまうのではないでしょうか。さらに、妊娠してしまう人もでてくる。産む人もいれば中絶する人もいる。その選択は様々な理由があるとは思うが、その多くは「望まない妊娠」ではないだろうか。最近こうした事は珍しくないくらい起こっている。信じられないかも知れないが、これが現実である。そして大きな問題である。ここで付け加えておきたいことがある。それは大学生になっても「望まない妊娠」がかなり起こっている。これはSEXの絶対量が高校生以下より多いからということもあるだろうが、大学生になっても正しい知識をもち、正しいSEXができていないという事の現れではなかろうか。

4、現実を受け入れ、解決策を考える

今の教育では足りない。特に実践的な教育が足りない。この実践的な教育をどのように行えばいいのか。まずは、小さい時から「性教育」がある環境をつくならなければならない。幼稚園の時から「性教育」の導入である「自己決定権についてや、NOといっていいこと」などを教ええる。小学生に入学した段階でそこに「性教育」に関する授業と、その教師がいれば、それが当たり前となり、「性」についてとても自然に受け入れる事ができるであろう。授業の内容だが、「性教育」だけでなく飲酒・喫煙の話や、人権問題などの話をするのもよい。現在あるゆとりの授業を生かしてもよい。しかもこの教師はコーディネーターとして専門の講師などを呼びながら授業を造っていけばよいだろう。そして実践的教育の内容だが、男性の射精のことや、女性の月経のことなど男女ともに学ぶ。そして避妊の仕方・種類・避妊具の使用方法、STDの種類・感染経路・症状・予防方法などを細かく学ぶ。さらに、妊娠・中絶についても考えを深め、SEXに興味関心を持ち、正しい選択ができるようにするのだ。その他にも男女問題はたくさんある。こうした問題を授業でとりいれれば、現在のような問題は減少すると断言してよいだろう。そして、こうして教育し、正しい知識をもった人間を育成することは、将来の教育者をつくることになるのである。

提言－2　思春期・相談業務のあり方　上原　大輔

現在、相談業務と聞くと、電話相談や学校のカウンセラー室などを思い浮かべる。またはラジオの番組で相談する、とか。

でも、実際利用してる人は少ないと思う。電話もなんか緊張しちゃうし、ましてや学校のカウンセラーなどは、その相談の内容が担任の先生にバレてしまうかも、とか診察室？に入るところを友達に見られないだろうか、とか色々心配である。身近な人物に悩みがバレてしまうのは最も恐れることだ。はたから見ればそんなに大した事でなくても、悩んでる当人にとっては大問題であり、その事に少なからず後ろめたさを持っている、はずだからである。

もっと第三者で、かつ自分が悩んでることに詳しい人に話したい、と思う。例えば同じ悩みを持った経験がある先輩。あと、今現在同じ悩みを抱えた人はどう思い、どう行動しているのか知りたい。できれば、相手に自分の素顔が分からないように。

そんな理想の相談屋さん。それは、ホームページという形で実現可能だと思う。

★★★★★

・・・そこにアクセスすれば、掲示板やチャットがあり、リアルタイムで悩みを打ち明け、いろんな意見を聞くことができる。また、たくさんカテゴリーがあって医師が細かく丁寧に答えてくれる「Q＆A集」を見れば、たいてい解決できそう。もっと詳しく知りたい人のために各分野のリンク集がある。

つまり、このページでは、医師にきちんと相談するのと、同じ悩みを抱えた仲間との一種ピアカウンセリングをするという、大きく分けて２つの相談業務の性質を持っている。

時には、オフ会のようにそのページで知り合った人と会えるイベントなどを用意する。そこでは、講演会などもあるが、基本的には和やかな雰囲気で友達作りがメイン。来た人は「ひとりじゃないんだ」って思える。講演会は、芸能人などを呼んだりして（飯島愛とか）豪華で行きたくなる感じ。もちろん無料。

★★★★★

こんなホームページがあれば良い。今でも、もしかしてあるかも知れない。でも、あまり知られてないのが現状だ。そこで、そういうページを国が公式に運営する。

国が運営する、というのは深い意味はなくて、単にその広告の手段としては理想的だと思ったから（より多くの人にこのページの存在を知ってもらいたい）。ただ逆に「国家」というフィルターを通してしまうとタブーとなるようなトピックもあると思う。例えば同性愛の問題。国の立場としては、同性愛を肯定的にとらえて良いかどうかなど微妙である（役人の皆さんは結構年配だと偏見を持ってる人が多いだろう）。そういう面だと、企業のバックアップをとりたいところだ。

また、新聞などに特集を組んでもらったりして、メディアを利用したい。ＴＶＣＭ、電車広告なども。あと、若者に人気のあるサイトにリンクを貼ってもらう。例えば宇多田ヒカル（同世代だし）のページ、などなど。

大事なのはそのページを、すごく入りやすくすること。オシャレな色合いで、また相談員の顔写真を付けるとか、清潔な印象。そして、堅苦しくない感じ。

と、ここまでホームページの話をしたが、この相談業務に、プラス生身の相談できる人がいたら理想である。相談する側としては、実際学校へ行ったりして普通に友達と話したりしている自分と、また家でパソコンに向かっている自分がいるわけで、その２人はめったに交わる事がない。そのうち、どっちの自分が本当の自分か分からなくなって悩むかもしれない。そこで、生身の「相談先生」が普通に学校、または身近にいれば、、、この２つの世界のギャップをうめることが、少しはできるのではないか。この「先生」案は、将来的には実現したいものだ。

とゆーわけで、まずは、ホームページという形で、どうでしょうか？

提言３．性的虐待・暴力　　国分　泰子

そもそも日本では「虐待」という言葉にあまり馴染みがないばかりか、さまざまな誤解がつきまとっている。「虐待」というと、身体的虐待がイメージされやすいが、外傷の残る暴行ばかりでなく、言葉による暴力なども含む。表に現れてこない分だけ他のケースの方がより深刻なことも多い。

とくに“性的虐待”となると、「性交動を伴わなければ性的虐待でない」と思われがちである。しかし、性的虐待とは、子どもの心に性に関わる消えない傷を残すことを指し、「実際に接触があった」かどうかは問題ではないのである。

性暴力の中には、子どもの性的虐待も含まれており、ドメスティックバイオレンス（DV）の中の性的虐待も含まれる。また、ドメスティック・バイオレンスは、妻への暴力だけでなく、子どもへの虐待を含んでいる場合がある。

そこでまず、広く子どもに対する虐待について取り上げたい。

家庭で、学校で、託児所で、ベビーシッターの間で、子どもに対する虐待が最近増加していると言われる。日本の児童福祉法では、「児童虐待」とは、加害者が「親か親に代わる保育者」に 限られているため、それ以外の加害者からの虐待を含めれば、さらに虐待件数の統計的数字としても 増えるだろう。子ども虐待は多くの場合家庭内に潜在しており、極端な事例のみが児童相談所へ通告され、社会的に表面化するにすぎないのである。

その原因としては、やはりお互いの不干渉、無関心が大きいのではないか。地域では、近所付き合いが薄れ、核家族化が進み、家族自体の規模も小さくなったことが、家庭を閉鎖された空間にしてしまっている。また、家庭内においても、親が子の学校で受けた虐待の傷に気づかない、というように親子が向き合う時間も少なくなっている。

社会全体が忙しく、せわしなく時間が過ぎてゆく現代において、自分のことに精一杯で、お互いあまり干渉しあう時間も心のゆとりもない、という現実もわかる。しかし、人と人とがお互いに関心を持ち、より充実した個人生活を送れるよう心がけていくことこそ、全体でより良い社会を作っていけるのではないか。

身近なはずの家庭で学校で地域で、虐待や監禁といった事件が起きていることも気づかない。よくマンガに見られたような近所の「おせっかいおばさん」といった役割が今の地域社会に必要とされているのだと思う。子どもにとっても、そのとき“うるさい、余計なお世話だ”と思いつつも、後々気にかけてもらっていることのありがたみもわかってくるものである。人間関係が希薄になっている今こそ、そうした“うるさい”くらいの周囲の目が必要に違いない。

そうして人付き合いを知らずに育ってしまった子どもがまた、同じように不干渉な親子関係、家庭を気づき、そうした人々が集まって不干渉な地域社会を作ってしまう。虐待、暴力といった行為は子どもの頃に受けた傷が原因となり、被害者が大人になって加害者になってしまうことが多いと指摘されるが、そうした再生産、悪循環は家庭内でも地域でも起こりうる。ちょっとした周囲への気配り、一人一人の心がけ次第で少しでも虐待を防ぐことができるものだと思う。

周囲の目、という意味で親子や近所同士の人間関係が虐待への予防につながる、と述べたが、虐待の当事者という立場にたってしまうことの原因は何であろうか。次に、子ども虐待、ドメスティック・バイオレンス、性暴力の３つに共通して言えることを考えたい。

そこには、力のあるものがないものをコントロールしようとする支配の現れとして、社会や個人に浸透している「こうあるべきだ」との先入観があるのではないか？「親らしさ」「子らしさ」「夫らしさ」「妻らしさ」そして「男らしさ」「女らしさ」という認識は、無意識のうちに社会全体に存在しているのが現実だが、そこに自らの虐待の被害者としての過去があったり、何か心に歪んだものを持っていることが原因で、その個人が加害者となってしまうのではないかと思う。

「らしさ」を求める意識は、偏見や差別的な抑圧を生む。それは加害者自身に対するものでもある。たとえば、親が子どもに「子どもらしさ」を求め、思うとおりに行かないときに虐待が生じるとすれば、それは親自身に対しても「親らしさ」を求める社会の抑圧がかかっているに違いないと思う。

また、たとえば性暴力に関して、男性が女性に対して暴力をふるうときには、男性の女性に対する「こうあるべきだ」という性の観念が背景にある。そこには、被害者の女性の性的な魅力といったものは関連がないことがわかっているようだ。よって、性暴力とは、男性の性欲という本能の結果というよりも、女性の腕力や体力の弱さ、社会的立場の弱さにつけこんだ犯罪、と言える。自分の力を誤った方向に用いて、相手を支配し、相手の安全や尊厳をおびやかすのが「暴力」「虐待」であるとするなら、「痴漢行為」もそうした立派な「暴力」のうちだと私は思う。痴漢の加害者は、被害者に対して「この子なら何も言わないだろう」と判断する、という。それは被害者の外見からくる思い込みなのだろう

が、加害者が「こうあってほしい」と願う「らしさ」像をそこに見ているに違いない。

親は子に、子が親に、そして男性は女性に、女性が男性に対して、自分と違った立場だからこそ「こうであってほしい」と期待してしまう、自分にないものを求めてしまう気持ちも理解できる。それが、「らしさ」である。しかし、それが力による押し付けとして、「虐待」「暴力」といった形で表れてくれれば、そこに存在する偏見や差別的な抑圧の問題もより深刻化する。親、子、夫、妻、男性、女性といったカテゴリーをあてはめるのでなく、あくまで個性を持った一人の人間としてお互いを見ることが必要なのではないか。一人一人他と違ってそれでいいのである。

人に対するときの一人一人の心がけから、社会全体が持つ先入観も少しは和らぐのでないか。「こうあるべき」と思い込み、決めてかかるために、自分の予想と違ったときに受ける精神的なショックも大きい。受け止め方次第であり、一つ一つの人格を尊重すれば、あれもこれもそれぞれが例外ならば、そこに共通する基準はなくなってくるはずである。

今こそ人と人がしっかり向き合い、お互いの個性を尊重できる人間関係が、家庭でも学校でも地域社会においても必要とされるのであろう。

提言－4　売春について　柳川　麻紀子

何年か前にちまたでは援助交際という言葉が流行っていた。なんのことはない、売春のことだ。女子高生たちがオヤジと性交渉、もしくはそれに準ずる行為をしてお金をもらうわけだ。

率直に自分の意見を言ってしまえば、そういう事をしている女子高生たちの気持ちが私にはまったくわからない。要は自分が欲しい物を手に入れるためにはお金が必要だから自分の体を売ってるんだろうけど、そんなに欲しい物なのかと思ってしまう。私だってブランド物は欲しいし、お金さえくれればいくらだって欲しい物は出てくる。けど、だからって自分の体を売る気になるだろうか。そういう物、商品ってのは所詮一時的なものだと思う。この前まではヴィトンのバッグが欲しかったけど、それは手に入れちゃったから今度はフェンディのバッグが欲しくなった、みたいな。確かに売春って１回しただけで自分のところに数万円というお金が入ってくるわけだからこんなにオイシイ仕事はないかもしれない。でも逆にいうと私は売春したお金で遊んだり、欲しい物を買うなんて絶対に出来ない。普通のバイトは安給料だし、雑用ばっかりさせられるけど、それだけ苦労したお金で念願の物を手に入れた時の嬉しさはそのぶん格別なものになる。別に安給料だって自分はまだ大学生なんだし、そういうもんなんだって理解している。援助交際をする人たちのそういうお金と自分の体に対する価値観の違いが私にはまったく理解できない。さっきも書いたけど物なんて所詮一時的なもんです。でも自分の体は違う。どんなに嫌になったって決して変えられるものではないし、一生付き合って行くもんなんです。私は自分の体は一生大事にしていきたいし、またそうするべきだと思う。発展途上国と違って日本は働こうと思えば（給料の良し悪しはあるけど）いくらだって働き口はある。欲しい物が出来れば、ちゃんと働けばいいんです。働いたら働いたぶんだけまわりは評価してくれます。

今までは売る側、つまり女側の事を書いてきたけど私はそれ以上に不思議でしょうがないことがある。それは買う側、つまりオヤジ達のことだ。どうしてもう何十年も生きて人生経験の豊富な人達が自分の娘くらいの少女とそういった関係を持とうとするのだろうと思う。まったく理性というものが働いているのか、人間のモラルはあるのかと人格を疑いたくなってしまう。本来は少女たちを教育する立場にある大人がそんな事をしてしまうなんて私には考えられない。確かに自分の体を売る女も悪いと思うけど、私はそれよりも、それ以上にはるかにオヤジが悪いと思う。

売春という問題は「別に私達がいいんだからいいじゃない」って言われればそれまでだし、すごく難しい問題だと思うけどまずはちゃんと法律で売春を認めることが必要だと思う。そのうえで具体的に、例えば少女売春を禁止するような法令を作ってしまえばいいと思う。そして罰則については圧倒的に買う側、オヤジの罪を重くするべきだ。取引なんて需要と供給が成り立たない限り、成立しないのだ。大人の方がしっかりしなきゃどうするのかと思う。なかなか売春の現場を取り押さえるのは難しいことかもしれないけど、そこから始めないと何も始ま

らない気がする。オヤジ達が買春することでどれだけ重い罪が課せられるのかを認識出来るようにすれば少しは減っていきそうな気がする。

あと最後に付け加えたいことが一つ。マスコミについてだ。女子高生ブームだったころ、援助交際という言葉が登場した。ある意味、この言葉はなにか流行語のような扱いを受けていた気がする。マスコミは女子高生の多くが援助交際をしているだとか言って、過剰に報道していたように思う。している事は売春と何ら変わり無いのに、この言葉は売春をもっと軽い、遊びのような雰囲気にしていると思うのは私だけだろうか。その言葉のイメージとか、「周りがしているから」などのようなマスコミの過剰な報道により、女子高生たちは売春を軽く考えていたように思う。これは売春に限ったことではないが、マスコミ側ももっと考えて伝える必要があるんじゃないかな、と私は感じた。

提言－５　メディアと青少年について

小川　峰貴子

☆メディアは“悪”か？

「マスコミ」と「青少年」、この二つのキーワードがある場合、たいてい「マスコミの青少年への悪影響」というかたちで結ばれる。確かにわたしたちの知識のほとんどは、マスコミなどのメディアからの情報によっている。そして実際、そういった情報は偏見に満ちていて、それでも何の疑問も持たずに、「真実」として受け止めてしまいがちだ。子供向けのヒーロー番組の暴力シーン、各種雑誌の性の描写、問題とされているメディアの内容をあげれば切りが無い。

しかし、誰が悪い？となると、難しい。本当に、メディアだけが悪なのだろうか。

思うに、メディアという情報の媒体ではなく、その媒体に乗せられる情報の質が問われるべきである。つまりメディアそのものではなく、その姿勢、どういう情報を誰に伝えたいのか、が問題なのだと思う。

☆　　「知る権利」と「表現の自由」

例えば映画で、授業で子供達に殺人をさせるという設定のものがあった。その悪影響が懸念されて、R指定がされたわけだが、監督側としては「１０代の若者にこそ見て欲しくてつくった」という。子供達が互いに殺戮を行うシーンは、伝えたいものそのものではない。そのシーンを含んだ映画全体のアートとしてのメッセージ性を無視した結果のように思う。伝えたいという気持ちが、伝えたい対象に届かないと言うのは残念だ。

しかし、悪影響を懸念する声も無視できない。確かに青少年にも「知る権利」はある。その対になるものとして「表現の自由」もある。ただ、「権利」「自由」の裏には「責任」があることを、忘れがちだ。自分の発した情報が、受け取り側にどう伝わるか。自分に必要な情報をどう集めてどう利用するか。そういう責任感や判断能力は、成長過程の子供たちにはやや高望Mもしれない。つまり情報の受け取り手の姿勢も問われるように思う。

☆　メディアを味方に

情報化社会の世の中で、実は信用できないような情報が当たり前のように氾濫しているのは確かだろう。だからといって「やらせ」を強行するメディアを一概に責めるわけにはいかない、。営利目的を超えて、世の中の実情を探し、伝える事に情熱を持ったマスコミ人も多数いる。そして真実を知りたい、信頼できる情報が欲しいという人はいくらでもいるのである。そういう人達のニーズに対応する手段として、大いにメディアを使うべきだと思う。各種相談業務、教育、マスコミの「悪」影響がおおきいのなら、その「影響力」を「好影響」に変えて行けば良いのでは？「情報」の裏にはかならず、それを伝えようという意思のある「人」が存在する。メディアはたんなる情報発信源ではなく、あくまで人と人とをつなぐもののように思っている。青少年やその教育者に対しメディアの情報の危険性を訴えるより、この媒体をうまく味方につけて、豊かになって行く方法を、指導して行くのが先決ではないか。

提言－６　家族について　本間　宣行

思春期にとって、家族は重要な問題である。誰もが家族に対して 100％満足してはいない。例えば、親との関係でかみ合わない時、親に何らかの問題があったり、自分自身に問題があったりする。そういうとき、自分に否があっても、なくても、家にいることが心地よくなくなり、外に出ることに解決策を求めてしまう。その結果、外で自分にかまってくれ

る人に依存してしまうことがあり、最悪の場合、不運（女性の場合、性的な関係のトラブルも多い）に陥ってしまう。

キーポイントは「帰れる家族」があることと「相談できる人がいる」ことだと思う。

帰れる家族とは対話ができ、解決策を一緒に考えてくれる家族。

相談できる人とは、自分の話を聞いてくれて、自分自身を整理する手助けとなるような、適切な、正しい情報を与えてくれる人。

つまり、血縁関係があってもなくても、自分のことを認めて、受けいれてくれる関係、精神的に信頼できる関係が思春期にとって必要なのだと考える。ここで重要なのは精神的に信頼できる人が、人間味あふれる「おとな」かどうかにかかってくる。

このような信頼できる人との関係が持てない人に対して、どう対応できるかは難しいが、相談できる人がいることで少しは解決するかもしれない。ただし、その相談相手は、自分自身も同じような経験をし、葛藤したことがあり、自分なりの解決策をみつけたことのある、人間性あふれる人であることが必要だ（少なくとも自分は同じ葛藤をしたことがない人の意見は聞けなかった）。つまり、同じ経験をしたことがあるコーディネータ・ボランティア・NGOが存在すること、それを支援・育成することが解決につながると考える。

４：座談会「思春期と家族」

（2回にわたった思春期の精神状態と家族に関する話し合いです。）

４　座談会－１．家族

☆帰りたい家

Ｃ（♂）「最近、家族といると楽しいんだ。帰る場所があるって感じで、そうするともうむしゃくしゃしない。家に早く帰ればいい、外で遊んでくる必要がない。この前友達から電話があったんだけど、“今、外でどうせ遊んでるんでしょう？”って言われたから“いや　家族と話すのが楽しいから最近は家に帰ってる”って答えたら“ちょっとわかる”としみじみされて。帰りたい家my sweet homeが必要だよ。」

Ｄ（♀）「どんな人でも　自分が受け入れられる場は必要じゃない。安定した場所が必要だと思う。それがないから暴走とか、引きこもりとか、自殺とかになるんじゃないかな？」

Ｂ（♀）「それはむしろ幸せかも。暴走できる場所があったということじゃない。それもできない人が多いと思う。何となく不満を抱えつつ発散できずに普通の生き方をしている人たち。そっちの方が怖いよ。外から見て、幸せそうでも中に何を抱えてるかわからないっていうか」

Ｄ（♀）「でも家庭環境はいろいろじゃない。それに人によって受け取り方も違うじゃない。親の離婚を乗り越えられる人もいれば、それでぐれちゃう人もいるし。傍から見ていい家族でも親に甘えてて、自立できないこともある。」

Ｂ（♀）「放任されることがうれしい人もいれば、Ｃ君はそれが嫌だったわけだし。その環境にあった人とない人でやはり違ってくる、人の感受性にもよるから。家族も人の集まりだから、楽しくしましょう、といって楽しくできるものではないし」

Ｃ（♂）「だから、表面上でなくて本当に“帰りたい家”が必要なんだ。あのころを振り返ってみるとただ帰るだけで、ホテルのように衣食住整っていればいいと思ってた。で、そこは前線基地だから、いてもつまらないから外に遊びに出る。外でどう時間をつぶすかだけ考えてた。いろんな所泊まり歩いたし。便利度の方が優先されてたね。」

Ｇ（♀）「なんか、仕事もないのに会社にいつまでも残って、家に帰らないおやじみたいだね。」

Ｃ（♂）「うん、バイトも部活もなければ遊びに行くしかなかったから。そもそも家っていう概念も無かったから、他人の家でもシャワーと寝る場所があればいい。体を休められればいいっていう感じで。家に帰りたくないと考えたこともなかったな」

Ｆ（♀）「家って、当たり前に帰る場所だったよねぇ。とくに不自由もなく、高校－部活－塾－家　というサイクルで。大学に入って自由が増えた分、今の方が家に帰りたくないことも多いよ」

Ｂ（♀）「そうだよね。わずらわしいし、干渉されたくないという感じ。今は家が拘束している場所になってる。今、前線基地が欲しい。」

Ｃ（♂）「でも、そういう生活って張り詰めているときはいいけど、そうでなくなるとつらいよ。心は

休まらない。いつも浮き草のようで、生きているという気がしなくて、帰る場所はあったけど、心の帰る場所ではないんだよ」

☆理想の家族

D（♀）「じゃ、どんな家が帰りたい家なの」

C（♂）「表面上でなくて、安定している家庭。話し合える、本音で語れる家庭かな。おやじの浮気についてもは話しちゃえるような。」

B（♀）「でも、話しに参加できる年齢ってあるじゃない。ある程度、話がわかっている年頃なら客観的に見れるけど、あまりに小さいうちだとトラウマになることだってあるし。まだ夢にあふれている、傷つきやすい頃に浮気の話なんか聞いたら、男は皆そんなものとショックを受けてしまう」

D（♀）「小さい子って、親にこにこしていてほしいものじゃない。どんなにお金に困っていても、いつも親が深刻な顔してお金の話ばかりではダメで、親の笑顔を見て育つと、よく笑う子になるっていうじゃない」

F（♀）「いつも家に帰ると喧嘩してて、怒鳴り声ばかり聞いてたら、そういう家庭しか将来築けないかもしれない。話し合いといっても、いつも感情を剥き出しにしていたらいいとは言えない。」

C（♂）「肝心なのは“人間”で、face to face というのが必要なんだよ」

B（♀）「多分、思いやりがあるかないかで話し合いの内容も変わると思うよ。でも家族だからといって全部話す必要あるのかな？」

D（♀）「今、人恋しい時期で、密接な家族関係を求めているからこそ思うんで、一生そうとは限らないよ」

C（♂）「常にそうした関係があったら、暴走していなかったかもしれないし、少しずつ発散するタイプに育っていたかもしれないな。」

B（♀）「でも、暴走があったからこそ、今の家族のありがたみがわかるのも事実でしょ。何か起きないとその良さ、ありがたみには気づかないもの。仕事人間の父親が病気になって初めて家族と向き合ってその良さを知るみたいに。それで仕事を辞めて、家族と田舎暮らしを始めちゃったりして」

C（♂）「でも本当に、今、家が楽しくて、横道に反れなくなった。家族団欒してれば、外で面白いことを見つけなくてもいい。スポーツをしたら家に帰って来よう、と考えるようになって、どこかに寄る必要もバカなことをしにいく必要もない。sweet home がイライラを癒してくれる。帰りたい家って、自分を認めてくれる場、自分をかわいがってくれる場で、家があれば、心の効率性が高いっていうか、無駄にとんがる必要もないし、わざわざ他に手を出す必要もないから、やりたいことに集中できる。くだらない奴がいても、ただバカらしく思えるだけで、殴ってやろうとか相手にしなくなったもん。」

B（♀）「少し、大人になったんだねぇ。つまり、安らげる場があると心のゆとりが出てきて、自分で思いつめなくなるってことかな。でも理想の家庭って、なんか、そういうのって、両親とか、自分の身近にいる夫婦や家族とかまわりに影響されてない？」

D（♀）「家庭の再生産って訳？」

B（♀）「家庭とはこういうものと思っていることが多いんじゃない？　そういう環境で育ってきて、それが居心地がいい環境だとか。他の家を体験することはできない訳だから。私はキャリアウーマンになりたいから、“奥さん”が欲しいな、なんて考えてたんだけど。かわいくて、料理も洗濯もできて、帰ると相談に乗ってくれたり肩をもんでくれたりして、世にいういわゆる“奥さん”役が欲しいのよ。それでね、だんなさんも欲しいの。こっちは年上で、落ち着いていて経験豊富で、何を尋ねても的確な答えを出してくれるような。そんなこと考えてたら、これは自分にとって　両親なのでは？　と思い当たったのね。」

F（♀）「確かに、仕事している女の人は自分が働くので精一杯で、世話してくれる人が欲しいって皆言ってるね。でも“奥さん”役をやりたい男性もいるはずだよね」

B（♀）「ミセス・ダウトって映画見た？　あれに出てくるお手伝いさん、おばあちゃん的存在が欲しいな。家事ができるだけでなく話を聞いてくれる人」

☆家族を作る

C（♂）「俺、自分から家を飛び出したじゃない。親と相性が合わなかったし。なんか自分の見たくない弱い父親像を見たというのもあったかもしれな